

## 「令和8年度教育研究構想」

### 1 研究主題

今よりちょっぴりレベルアップしようとする児童の育成  
～目指す姿の具体化と自分事の間いを持たせる授業展開を通して～

### 2 主題設定の理由

#### (1) 算数科授業アンケートと単元末テストの結果から

本校では、昨年度、算数科において「主体的に学ぶ児童の育成～逆向き設計の授業づくりを通して～」という主題のもと、目指す児童の発言を明確にした授業づくり（逆向き設計の授業づくり）を行うことで、児童の主体性を高める研究に取り組んできた。

昨年度、学期末に行った教師の授業づくりに関するアンケートと算数科単元末テストの集計結果は以下の通りである。

【授業づくりに関するアンケート】	7月	1月
① 児童に書かせたいまとめ（振り返り）を事前に書いて授業にのぞむことができた。	67%	92%
② 教えることと考えさせることを整理して単元に入れることができた。	75%	100%
③ 児童から引き出したい言葉を明確にして授業にのぞむことができた。	75%	100%
④ 教師が引き出したい言葉を、児童に使わせることができた。	75%	83%

【算数科単元末テスト集計結果】	1学期	3学期
① 到達率 80%以上の児童の割合	77.6%	81.6%
② 到達率 70%未満の児童の割合	8.2%	7.1%

授業づくりに関するアンケート結果の項目①②③から、教師がねらいとする児童の発言を明確にして授業づくりを行う意識が高まったことが分かる。指導案検討や模擬授業の中でも、どう指導するかという指導観ベースの協議から単元や本時で何をを目指すべきかという単元観ベースの協議が行われるようになった。算数科単元末テストの結果も1学期に比べ、数値が向上している。標準学力調査に関しても、全学年が全国平均を上回る結果であったことから、多くの児童が学習内容の定着を図ることができたといえる。

しかし、全ての児童の学力をのばせたわけではない。学習内容の定着に課題のある児童は一定数いる。彼らの多くは問題や友達への考えに関心をもてず、問題解決に向かえていない。数値には表せないが、明確にしたゴールからこぼれ落ちた児童を救いきれなかった。

【算数の授業に関するアンケート】	児童		教師	
	7月	1月	7月	1月
① 問題を見たとき、今まで習ったことで使えるような考えはないか、考えている。	88%	90%	75%	83%
② 自分なりに答えを出している。	88%	94%	92%	83%
③ 今まで習ったことを使って問題を考えている。	86%	86%	83%	92%
④ 図や式、言葉を使って問題を考えている。	87%	90%	50%	83%
⑤ 「もっといい方法はないかな」と考えている。	90%	86%	58%	67%

算数の授業に関するアンケートでは、概ね90%近い児童が肯定的な評価ができています。特に①②④は肯定的に自己評価する児童の割合が増えている。教師も①②③④は1学期に比べ、肯定的評価の割合が増えている。自分なりに答えを出したと感じている児童が増えたこと、教師が図や式、言葉を使う、類推的・演繹的に考えるといった児童の姿を引き出そうと授業づくりに取り組めたことは昨年度の成果といえる。

しかし、教師アンケート②は肯定的評価の割合が減っている。この項目は最も多くの児童ができるようになったと感じている項目である。児童の実感と教師の見取りが乖離していることがわかる。

## (2) 主体的に学ぶ姿とは

昨年度末、校内研修において職員同士で研究の振り返りを行った。(左図) 逆向き設計により指導内容が明確になったこと、丸つけ法による意欲付け、教科書の活用方法といった成果が挙げられた一方で、児童が自分の姿をメタ認知できていないこと、主体的に学ぶ姿が共有できていないことが課題として挙げられた。そこで、職員同士で「主体的に学ぶ姿」について意見を出し合った。ここで出た意見は以下の通り。

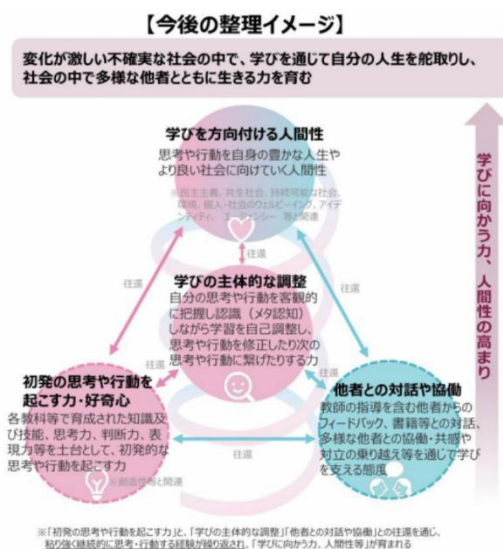


- ・ 学習したことや自分の姿を振り返り、自分の成長を感じたりさらなる問いをもととしたりする姿
- ・ 〇〇な見方をしたらできた、〇〇にも使えそうなど「学び方」を学ぶ姿
- ・ 試行錯誤する姿 ・ 自分に合った学習方法を選んで学ぶ姿 ・ 自他を比較し学びを深めようとする姿

これらを包括し、より具体化した姿を児童と職員で共有することで、共通のゴールイメージをもって取り組を進めていく必要がある。

## (3) 中央教育審議会 教育課程企画 特別部会 論点整理 (令和7年9月25日) から

次期学習指導要領に向けた論点整理において、学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージが示された。(左図) この中核として「学びの主体的な調整」が位置づけられた。この図の中で学びの主体的な調整とは、「自分の思考や行動を客観的に把握し認識(メタ認知)しながら学習を自己調整し、思考や行動を修正したり次の思考や行動に繋がったりする力」と説明されている。つまり、学習においていわゆるPDCAサイクルを回していくことである。植坂(2026)は、学びの主体的な調整を考える上で欠かせないのは「見通し」「振り返り」「メタ認知」である。(中略) 実行する前には、きちんと見通しを持ち、自分の理解状態を自覚し、分からないことにきちんと気付ける力を持ち(すなわちメタ認知を持ち)、効果的に振り返ることが大事であると述べている。



ここで述べられていることは、(2)で示した職員の意見交流と重なる。つまり、本校職員が考える「主体的に学ぶ姿」とは、論点整理で示された「学びの主体的な調整」にあるのではないだろうか。

(1) (2) (3) から、昨年度の本校の教育研究の成果と課題を以下のように整理する。

- |            |                |            |                          |
|------------|----------------|------------|--------------------------|
| <b>成果①</b> | ゴールを明確にした授業づくり | <b>成果②</b> | 児童の算数科の学習内容の定着           |
| <b>課題①</b> | 主体的に学ぶ姿の具体化と共有 | <b>課題②</b> | 自分の理解状態を自覚し、学びを主体的に調整する力 |

#### (4) 研究主題について

昨年度の研究の成果と課題を踏まえ、今年度は主体的に学ぶ姿を具体化し、児童と教師でイメージを共有しながら研究を進めていく。そこで研究主題を「今よりちょっぴりレベルアップしようとする児童の育成」、副題を「目指す姿の具体化と自分事の問題を持たせる授業展開を通して」とする。

##### ①「今よりちょっぴりレベルアップしようとする」とは

本校における主体的に学ぶ姿を具体化したものである。この文言を児童と教師で共通理解を図り、研究を進めていく。児童が「ちょっぴりレベルアップ」できたかどうかを校内統一の振り返りシート（成長ノート）を活用して振り返らせることで、自らの学びをメタ認知できるようにしていく。

##### ②「目指す姿の具体化」とは

単元や本時で目指す児童の姿を具体化する。昨年度の研究では、目指す児童の発言を明確にした。今年度は「目指す姿」とし、その範囲を広く捉える。どの問題ができればよいのか、どのように記述できればよいのかなど、児童が本時の目標を達成できた姿を授業者が具体化する。その姿が表出する授業にこだわることで、全ての児童の力をのばしていく。事前研修（指導案検討・模擬授業）でどんな姿を目指すべきかを検討し、授業研後に全員が目指す姿に到達できたかを協議する。また、昨年度と同様に、普段の授業づくりでも、どんな姿を目指すかを明確にした授業づくりを行う。

##### ③「自分事の問題を持たせる授業展開」とは

今年度は、算数科に限らず、様々な教科において主体的に学ぶ児童の育成を目指す。昨年度から逆引き設計の授業づくりに取り組むことで、ゴールを明確にすることができた。だが、それだけで、児童に力を付け、主体的に学ぶ児童の育成ができるわけではない。ゴールに向かうまでの過程についても授業者は明確な意図をもって授業づくりを行うべきである。そこで、教科間の共通項となる「問い」に研究の視点をおく。ここでいう「問い」とは、児童が教材に働きかけ、抱いた好奇心や違和感、ズレ、疑問などを言語化したものと定義する。児童が教材に働きかけることで、両者の距離が縮まれば、児童の抱く問いは自分事のものとなると考えられる。ただ、授業者が何も手立てを打たなければ、児童が教材に働きかけることはない。授業者は児童が教材に働きかけるための手立てを講ずる必要がある。問いが自分事のものになれば、主体的に学ぶ姿を引き出すことができるとともに、まとめや振り返りの内容の質も変わってくると考えられる。論点整理の中で「当事者意識を持って、自分の考えを形成し、多様な他者と対話や合意を図る」ことが示されていることから、「問い」が児童にとって自分事となるような授業づくりを行うことが必要である。

### 3 研究仮説

学校全体で主体的に学ぶ姿の共通理解を図り、教師が授業で目指す児童の姿を明確にするとともに、児童が自分事の問題をもって課題解決に向かえる授業づくりを行えば、主体的に学ぶ児童の育成を図ることができるだろう。

### 4 取組

- (1) 本時で目指す児童の姿を明確にする。→事前検討で協議し、授業後に検証
- (2) どんな問いをもたせるか、どのようにもたせるかを明確にする。→事前検討で協議し、授業後に検証
- (3) (1) (2) を指導案に明記する。
- (4) 自らの学びをメタ認知するために、校内統一の振り返りシート「成長ノート」\*1を活用する。
- (5) しゃべりバ season 2\*2を月2回程度実施し、実践交流を行う。

## ※1 成長ノート

- ・単元の最後などにおいて、左図のシートを使って振り返りを書く。
- ・書いた振り返りはファイルに綴じていく。
- ・最低でも学期に1回は成長ノートを使った振り返りを行う。
- ・今年度取り組む中で、改善点を共有し、よりよいものへと作り上げていく。

## ※2 シャベリバ season2

板書と教科書（朱書）をもとに、職員同士でノンフォーマルな場の学びを促す。話題は以下の通り

- ①どんな姿を目指したか ②自分事の間いとするために行った手立て ③児童の学びはどうだったか

## 5 検証方法

### (1) 学力調査

- 今よりちょっぴりレベルアップしようとする事ができる児童の割合を90%以上にする。（自己評価・教師評価）
- 各学期のテスト到達率80%以上の児童を学級全体の70%以上にする。また、60%未満の児童を15%未満にする。
- 全国学力調査、標準学力調査において全国と県平均を上回るとともに、正答率が30%未満の児童を15%未満にする。

### (2) アンケート（各学期末に実施）

1	今よりちょっぴりレベルアップしようとしている。
---	-------------------------

## 6 研究方法

- ・PDC Aサイクルに基づき、授業実践と理論研修を中心に研究を行う。
- ・提案授業は次の流れで行う。

P 指導案検討（模擬授業を含む）→D 授業参観→C 事後協議→A 課題を踏まえて日頃の授業改善、次回の提案授業へ

### ・提案授業の協議の視点

- 自分事の間いをもたせることができたか。 ○本時で目指す姿を引き出せたか。

### ・神石高原町の協議の視点

- ①質の高い「間い」を設定している ②単元構成を工夫している  
③授業者が子供の学びをファシリテートできている ④デジタル機器を活用している

（参考文献）授業力&学級経営力 NO.192（2026）『新年度準備のすべて&次期学習指導要領』明治図書  
白杉 亮（2025）『自己調整につながる学習理論をビジュアルでまとめました』明治図書  
伊藤 崇達（2026）『教師のための「自己調整学習」ガイドブック』明治図書

学校教育目標

自ら学び 自ら考え 協働できる 心豊かな子供の育成

昨年度の成果と課題

- 成果**
- ・ 逆向き設計の授業づくりに取り組んだことにより、指導内容を明確にして授業づくりができた。
  - ・ 多くの児童の算数科の学習内容の定着を図ることができた。
- 課題**
- ・ 学習内容の定着に課題がある児童が一定数いる。
  - ・ 主体的に学ぶ児童の姿が具体化できていない。
  - ・ 自分の理解状態を自覚し、学びを主体的に調整する力

めざす児童の姿

- ・ 「知りたい、よくしたい、賢くなりたい」を持ち、見通しをもっている。
- ・ 自分から「よくしたい、賢くなりたい」の実現に向けて、粘り強く、我慢強く取り組む。
- ・ お互いの「知りたい、よくしたい、賢くなりたい」を尊重し、よりよい解決に向け協働している。

研究主題

今よりちょっぴりレベルアップしようとする児童の育成  
～目指す姿の具体化と自分事の問題を持たせる授業展開を通して～

研究の仮説

学校全体で主体的に学ぶ姿の共通理解を図り、教師が授業で目指す児童の姿を明確にするとともに、児童が自分事の問題をもって課題解決に向かえる授業づくりを行えば、主体的に学ぶ児童の育成を図ることができるだろう。

研究内容

主体的に学ぶ児童の姿

教員の授業力アップ

- しゃべりバ（実践交流）  
職員同士のノンフォーマルな学びの場の設定
- ①どんな姿を目指したか
- ②自分事の問題とするために行った手立て
- ③児童の学びの実際

授業づくり

- 学びのメタ認知  
成長ノート
- 自分事の問題  
教材に働きかける手立て
- 逆向き設計の授業づくり  
目指す児童の姿の具体化

知識・技能の定着

- ぐんぐんタイムの活用

この問題ができるようにしよう！

なんで？  
どうして？  
やってみよう！

目指す姿の共有【今よりちょっぴりレベルアップする姿】

支持的風土のある学級集団

検証の指標（達成目標）

- 今よりちょっぴりレベルアップしようとする児童の割合を 90%以上にする。  
(自己評価・教師評価)
- 各学期のテスト到達率 80%以上の児童を学級全体の 70%以上にする。また、60%未満の児童を 15%未満にする。
- 全国学力調査。標準学力調査において全国と県平均を上回るとともに、正答率が 30%未満の児童を 15%未満にする。